



TITLE:

顔元の學問論

AUTHOR(S):

小野, 和子

CITATION:

小野, 和子. 顔元の學問論. 東方學報 1970, 41: 467-490

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66448>

RIGHT:

顔元の學問論

小 野 和 子

一

人は動物なれば、すなわち動、尙し。人は理性的動物なれば、すなわち動にも、かならず道あり。然れば何ぞこの動を貴ぶや、何ぞこの道あるの動を貴ぶや。動、以て生を營む、此、之を淺言せるなり。動、以て國を衛る、此、之を大言せるなり。皆、本義に非ず。動は、蓋し吾が生を養い、吾が心を樂しませるのみ。朱子は敬を主とし、陸子は靜を主とす。：老子曰く、無動、大となす。釋氏は、務めて寂靜を求む。靜坐の法は、朱陸の徒たる者、みな、之を尊ぶ。近ごろ因是子なる者あり。靜坐法をいう……然れども予、未だ敢えて之に效わず。愚拙の見は、天地、蓋し、惟だ動あるのみ。

肢體の纖小なる者は、舉止、輕浮にして、膚理の緩弛せる者は、心意、柔鈍なり。身體の心理に影響せるや、かくの如し。體育の效は、筋骨を強くするに至り、因つて知識を増し、因つて感情を調し、因つて意志を強くす……(新青年三卷二號)

これは、五・四運動前の一九一七年、二十八畫生なるペンネームで毛澤東が、『新青年』に發表した「體育の研究」の一節である。この文章において毛澤東は顔元に言及しているが、その主張は顔元の思想への共感をつよく感じさせる。^①このとき、毛澤東は二三歳、長沙第一師範の學生で、まだマルクス主義者にはなつてはいなかった。かれはこの論文で國力を充實させる

ためには、身體を自覺的に鍛練し、健康な身體と健全なる感情と強固な意志を育てようと訴えたのであるが、そこでは、

學校の設備、教師の教訓は、すなわち外的、客觀的なり。吾人は蓋し、なお、内的、主觀的なるものあり。夫れ、内、心に斷ずれば、百體、令にしたがう。禍福は、己れより之を求めざる者なし。我、仁を欲すれば、斯ち仁至る。況や體育においてをや。苟くも自ら振わざれば、外的、客觀的に、善を盡くし、美を盡くすと雖も、亦た猶お、益を受くること能わざるなり。故に體育を講ずるには、必らず自ら動くより始む。

として、客觀的、外的なものに對して、主觀的、内面的なるものの確立が要請されていて、毛澤東が革命運動のなかできわめて重要視した「主觀能動性」への指向がすでにみられるのである。

清末、『國粹學報』に紹介せられていらい、顏元は、實踐窮行を重んずる思想家として、また文に對する武備軍事を重んずる思想家として、當時、革命運動に従事する青年たちの心をとらえていた。毛澤東もまた、顧炎武、王船山などとともに顏元の著書を読み、實踐のために自からを自覺的に鍛練しようとするかれの思想に大いに共感するところがあつたのであろう。

當時、こうした評價のほかにも、胡適のように、顏元をプラグマチストとする見方や、民國九年に徐世昌が設立した四存學會、あるいは雑誌『四存月刊』のごとき、六藝の復興・實學の振興という觀點から評價する見方もあつて、顏元の思想は、二百年の歲月をこえて、清末民國初の思想界に一定の影響を與えていたわけである。

顏元（一六三五～一七〇四）字は渾然、號は習齋、北直隸博野の人、は、清初、康熙のいわゆる「盛世」のかげで、異民族支配の屈辱を心に深く刻みながら、そうした現状をゆるしている士大夫存在を鋭く告發していつた思想家であつた。

舊中國の士大夫意識にあつては、天下國家を治めるのは、あくまで士大夫であつた。天下國家にかゝわるすべての責任は士大夫がとるべきである。だが、現實の士大夫は、その責任を自覺しないばかりか、甘んじて滿洲王朝の奴隸となりはてている。かれらをそうさせたのは、朱子學と訓詁の學である。顏元は、そこで當時の學問のあり方に對して眞正面から、たたかいをいどみ、それにかわるべきものとしての實學——六府三事三物の學を提倡した。

明が滅亡してのち、思想家たちの多くは、明の政治體制のなかに、明王朝滅亡の原因をさぐり、政治體制の根本的な變革をもとめて、來るべき漢民族の王朝に期待しようとした。黃宗羲の『明夷待訪錄』はそのもつとも典型的なものといえる。顏元自身も、順治一五年、『存治篇』を著わして、井田・封建・學校などに關する議論を展開しており、また康熙九年には『大明會典大政記』⁽²⁾を著わして明の政治制度について論評している。だが、朱子學に懷疑をいだきはじめてのちは、そのような政治制度の變革よりは、むしろ、朱子學の徹底的な批判をつうじて、政治のない手としての士大夫自身の變革を追求しようとした。明を滅ぼしたものは、滅亡にのぞんで、なお詩賦を講じているがごとき士大夫存在のあり方ではなかつたのか。また士大夫をかくあらしめている學問のあり方ではなかつたのか。

明末、心學の橫流と稱せられた王學末流の空疎虛妄の學問に對する批判はもちろんこの時代の思想家に共通するものであつた。かれらはいずれも經世致用の學を倡え、學問における實踐的關心の不可缺を説いた。そして讀書博學をきわめて重視し、聖人の學——經學と歷代の政治制度——史學を事實に即して考究し、來るべき日にそなえようとしたのである。そこには、實踐的關心と不可分にはあるが、考證學への方向性がはさまれてきた。康有爲が、顧炎武の清朝學問における功績と同時に、孔子の經世の志を沒却し、學術の頽廢を招いた罪魁としてはげしくかれを攻撃したのは、そのてんを衝いたものにほかならなかつたのである。

これに對して顏元は、そうした方向とはまったく相反し、むしろそれと對決する道をえらんだ。その學問は、梁啓超がいうように建設の學問であるよりは、破壊の學問であつた。明末、空疎虛妄の學問と、異民族支配下の泰平にならずで、ふたたび「訓詁の學」へと流れていく士大夫たちに、かれがなげかけたはげしい「破壊」の言辭は、今日のわれわれになお語りかけるものをもつていであらう。またかれが「破壊」しようとして「破壊」しつくせなかつただけではなく、やがて、かれの弟子たちをおしながしていつたその後の學術史の展開のなかで、その學問批判のもつた問題提起のいみをいま一度問ひなおしてみることが、それなりに今日的な意味をもつであらう。顏元を研究する視點はさまざまなのがありうるだろうが、本稿が、

顔元の學問論と題したのは、そのゆえにほかならない。

一一

明王朝が亡び、滿洲族による異民族支配がはじまつたのは、顔元が十歳の時のことであつた。顔元とともに清初の四大儒と稱せられる四人の思想家のうち、黄宗羲（一六一〇～一六九五）が三五歳、顧炎武（一六三三～一六八二）が三二歳、王夫之（一六八九～一六九二）が二六歳でそれぞれこの天下の大事に遭遇したのに比べるならば、顔元はもつとも幼い時期にこれを経験している。かれの父顔景は、北直、博野、楊村の人で、蠡の朱九祚の家に養われて、朱姓を名のつていた。だが、顔元が四歳のとき、滿洲兵に伴われて遼東に赴き、音信を絶つた。養家との不和から自からのぞんで連行されたという。

順治二年、いわゆる圈地令が頒布され、旗地創設のために北京周邊の肥沃な土地が強制收用された。とくに圈地が多かつたのは、順天・保定・永平・河間の四府であり、圈地の最高額は六、九五五、九四九畝に達したという。このような清朝の征服者としての高壓的な政策が、華北の農民のはげしい民族的憎惡をかきたてるものとなつたであろうことは容易に想像されるが、この圈地について、かれは、養祖父の巡捕朱公行實においてつぎのようにのべている。

順治の初、劉里、圈せらる。旗奴韓某、恣横率意にす。耕田、産を失う者、日ごとに衆し。公、これを患え、その盜を窩すを伺いて圍みて之を擒え、縣府に鳴う。解して部律を按ずるに斬。赦に遇いて甦脱すと雖も訖に敢えて肆いままにせず。里閭の窮民、滿人の侮りを受けず、各々祖田を租り、今日に至るを得るは、公の力なり。（習齋記餘 一〇）

このように、かれは、華北にあつて旗人の奴隸が、主人の威光をかさに、農民から土地を奪うのを目のあたりにしながら成長した。だが、養祖父の朱九祚は、かならずしも反清意識をもつ人ではなく、反清復明の反亂にたいしてはむしろ敵對的な行動に出て、清朝から巡捕に任じられている。また顔元の弟子、李塏（字は剛主、號は恕谷）の家も圈地によつて土地を收用され、生

活は困窮をきわめた^⑤という。

顔元は、『存治篇』のなかで、「天地の間の田は、天地の間の人と共に享くべき」ことを主張し、井田の復活を主張しているが、このとき井田に反対するものを豫想して、

或いは、田を畫すれば亂を生ずという。至公、人を服し、情、自ら輯^{やわら}ぐは論なし。たとい、勢を以て論ずるも、國朝の圈占はほとんど京輔に半ばするも、誰かために亂をなせしや(存治篇 井田)

と反論し、圈地に當つて大して混亂を生じなかつたことをもつて、井田の實施可能の證左としている。土地收用といえは生活そのものを根底からくつがえす重大事である。かゝる征服者の掠奪と滿洲人の侮蔑にさらされながらも、清王朝の軍事的制壓下にあつては抵抗はほとんど不可能だつたのであろうか。

だが、いつの時期からか、かれは、滿洲王朝の異民族支配にたいしてつよい抵抗の意識をいだくようになっていた。そしてそれこそが、かれを學問批判へとはげしく驅りたてる力になつたのではないかと思われる。しかし、かれ自身は、あからさまにそれを語ろうとはせず、折にふれて宋の故事に託しつゝ、その心情を語っている。

太宗、北征して流矢に中たり、二歳にして瘡、發して卒す。神宗は之を言いて惓として流涕す。夏は本と宋臣たるに、叛きて帝を稱す。此れ、皆、臣子のともに天を戴くべからざる所の者なり。宋は歲ごとに遼夏に銀一百二十五萬五千兩を輸す。その他、慶弔の聘問、近倖に賂遺すること又たこれに倍す。宋、何を以て國を爲さん。買うに金錢を以てし、我を容れて君となさんことを求む。宋、何を以て名をなさん。又、臣子の一日として安んずべからざる所の者なり。而して宋、兵を擧げんと欲すれば兵足らず、兵餉を足らわさんと欲して又た足らず。荊公これを爲す、其れ已むを得んや。これを辟^{たと}うるに、仇讐、我が父兄を戕^{そこな}う。吾れ急ぎこれと訟し、遂に數々家貲を責むに至る、豈に已むを得んや。(年譜 六十二歲)

顔元によれば、王安石は「宋室の一書生」にすぎなかつたが、當時においては出色の人物であつた。そして、宋人が、「苟安、日久しく、北風をきいて戰慄する」情況のなかで、宋防衛の戦力を強化すべく、農田、保甲、雇役などの財政政策をとり、ま

たさまざまの戰略上の配置を行なつた。しかるに韓琦らは「荊公の大計」を理解しなかつたばかりか、はげしく非難を加えてゐる。これは「敵、わが備えをにくめば則ち備えを去り」、「敵、わが首あるをにくめば、まさに首を去らん」とするもの、敵に臨んで自ら武裝解除するにひとしいではないか。これは、ひとり荊公の不幸であるのみならず、宋室の不幸であり、「腐儒の見、おそるべき」である。

また、宋史では奸臣傳に入れられた韓侂胄(一一二〇七)を辯護してこういう。

南宋の金は北宋の遼と又た同年にして語るべからず。乃るに累世、岳飛の忠を知るも、累世、皆、秦檜の智たり。獨り韓平原(侂胄)のみ毅然として詔を下し金を伐つ。祖宗のために恥を地下に雪ぐものというべし。義に仗りて復讐するは、敗ると雖も猶お榮ある者、乃るに宋人、必らず之を誅して以て金に昇えんと欲するなり。なお人心あらんや。(同右)

韓侂胄は、いわゆる慶元の黨禁をおこなつて朱子學派を彈壓したが、かれによつて彈壓せられた朱子學の徒は、一體どうか。朱子の語録を観るに、見るならく、その岳忠武(飛)におけるや、天下の公好に従いて之を稱すと雖も隱忌あり。曰く岳飛、誅せらる。曰く岳飛、亦た横なり。曰く岳飛、只是れ、亂に殺すのみと。秦檜におけるや、天下の公惡に従いて之を貶すと雖も隱忌あり。曰く秦老、曰く士夫の小人と。何ぞや。(年譜 六十五歲)

文忠(歐陽修)の中夜、三たび起き、晦翁(朱熹)の警を聞きて大いに哭すは、皆、忠憤と謂うべきも、卒に國家のために、一矢を發し、一虜を殲すること能わず。學術、之を誤つに非ずや。自ら言う、「一として能くする所なく、徒らに、少くして、文字を喜ぶを以て世俗に許さる」と。何ぞ猛改して天下のためにその有用を圖らざる、而るに卒に三五の書生とともに朝堂に優游し、安を偷み自ら娛し、太平無事の士夫の樣をなす。醉翁亭(歐陽修は自ら醉翁亭記をかいている)もて自狀し、畫錦堂(歐陽修には畫錦堂記もある)もて相推すがごとく、全て燕雀、堂に處るに似たり。心目中、並えて汴京亡び、二帝虜にされるを見ず。方に力を盡くして熱心幹國の宰相と敵となり、方に軍心を得るの大將を忌妒してその任用を阻む。その中夜、三たび起きて憤恥するの心、いづくにありや。蓋し、戎敵、邊を侵すは古えより常事の二語、是れ書生の本情にして、偶

々憤恥を言うは是れ、乍ち見るの天理なり。吾れ、素と宋紀を閲して固より宋儒宋相、視て常事となせしを疑う。意らざりき、歐陽、無意中に露出せんとは。(習齋記餘 六 評(歐陽修) 答陝西安撫使范龍圖辭辟命書)

このようにして、かれは歐陽修、朱熹らが「國家のために一矢を發し」「一虜を殲す」ことをもなし得なかつたのは、かれらがいかに抗辯しようとも北敵から斷乎として國を守る氣概がなかつたからであると、かれらをはげしく糾彈するのであるが、それと同時にかれらをそうさせた學術のあり方そのものに鋭く迫つた。そのような學術は、無益の學であるばかりではなく有害である、宋を滅ぼし、明を滅ぼしたのは、まさにそうした學術のあり方ではなかつたであらうか。

眞宗、澶淵の役は是れ一時 將相 人あり。未だ周(敦頤)、程(顥・頤)、歐(陽修)、蘇(軾)の輩の禪宗・訓詁の文字、士習を壞し、人心を惑わさず。六軍、また用うべく、高將軍(高瓊)また、敢えて文墨の人を呵斥す。靖康の時に至りては、人心、風俗、壞惑することすでに甚し。……寇萊公(寇準)高將軍をして復た生かしめるも、いづくんぞ、滅亡を救わんや。朱子、かえつて之を氣盛氣衰に歸す。抑も天地の氣、人心の氣、皆、かくのごとき輩、之を衰えさせたるを、知れるや。この理、明らかならざれば、乾坤、復た振うの日なし。(朱子語類評)

王夫之のような僻地にあつた思想家とちがつて半ば圜地せられ、完全な軍事制壓下におかれていた京畿において、清王朝の異民族支配を直接的に語ることとはとうていゆるされる所でなかつたであらう。今や曾つての屬藩滿洲が中國全土を支配するという、凡そ遼、金とは同日にして語り得ぬ情況のなかで、かれにとつて、宋の故事を語るとは、明の故事を語ることであり、現代について語ることではなかつたろうか。のちに述べるように、かれは著述を自己目的とはしなかつた。それは「已むことを得ず」して著わさるべき性質のものであつた。したがつて、著書はきわめて少ないが、その數少い著述のうちに「宋史評」「宋相辨」なるものが存在したことが年譜によつて知られ、その一部が右にのべた王安石論と韓侂胄論である。しかし書物そのものは失なわれて存在しない。

さて、このようにかれは朱子學こそが、「天地の氣」「人心の氣」を衰えさせ、宋を滅亡に導いたとしてきびしく糾彈する

のであるが、かれは最初から朱子學に批判的であつたのではない。その學問的閱歷についてかれ自身の語るところによれば^⑥こ
うである。

順治十二年、二十一歳の時、通鑑を讀んで、「博く古今に學び、興廢邪正を曉る」こそ人であること知り科擧の受験勉強を
やめた。しかし道學や道學内部の論争については知らなかつたし、まして朱陸が、堯舜の三事、周孔の三物の學でないなどと
いうことはとうてい知り得べくもなかつた。たまたま同郷の彭通から『陸王要語』を示され、これこそ聖人の道と考えた。そ
の書物をわざ／＼筆寫したのもこの時である。廿五・六歳（順治十六・七年）になつて『性理大全』を得て周・程・張（載）・朱（熹）
の學旨を知つて、それに傾倒し、その提倡する靜坐にふけつた時期もあつた。順治十五年、二十四歳のときに著わした『存治
編』はむしろかれが「壯歲、宋儒の學を守りし時の作」である。とりわけ、康熙三年、王養粹（法乾）に會つてのちは「程朱の
學を専らにし」「乙巳（四年）、丙午（五年）、稍、日ごとに進むの勢」あつたという。これにたいして疑問をいだくに至つた直接
の動機は、養祖母の死に際して「朱子家禮」にしたがつて服喪したことであつた。この時、かれは病氣と飢餓によつて死に瀕
した。そして「朱子家禮」が性情に悖るてんのあることを感じたが、朱子のいう禮が聖人の定めた本來のものでないという所
までは考え及ばなかつた。近くの老人がかれの病氣の重篤をあわれんで、かれが朱氏の孫ではないことを打明け、はじめて自
分が朱姓でないことを知つた。かれは、大きな衝撃を受け、あらためて『朱子語類』を讀みなおし、宋儒のいう性の説が、完
全な誤りであることを知つて、「性とは何か」「學とは何か」を問うた『存性篇』『存學篇』を著わした。しかしそれでもな
お筐底に藏したまゝ、人に見せようとは考えなかつた。そして朱子學に對する公然たる攻撃を開始するのは、なお十數年のの
ち、康熙三十年以降のことになるわけだが、その前に、かれの滿洲への旅行についてのべておこう。

康熙二十四年、かれは、滿洲兵に連行された父顏景をたずねて遼東へ旅立つ。この大旅行は、かれの長年の念願ではあつた
が、この決心をうながした直接の動機は、友人王餘佑^⑦がこの年に死んだことであつた。王餘佑（五公山人）が眼を見開いたまゝ死
んだのを知つたかれは、「けだし山人の父兄、誣いられて燕市（北京）に駢死して骨收めざるを以てなり^⑧」と父を尋ねる決意を

あらたにしたのである。

この王餘佑の父は、滿洲が華北を占領してまもなく密告により謀反の廉で逮捕され北京に送られた。かれ自身は叔父の家を繼いでいたが、兄と弟は「何の面目あつて人間に視息せんや」と、兄は自ら名乗り出て父とともに北京で殺され、弟は密告者の一族三十人を殺して復讐した。このとき、王餘佑も逮捕されたのをさる人の盡力でのがれ、いご五公山にこもつて五公山人と稱したという。その著わした書物は、もつぱら軍事にかゝわるものであつた。おそらくかれの心のなかには父と兄を殺した滿洲王朝とその走狗に對するはげしい復仇の念がうづまいていたであろう。かれの眼が死してなお閉じ得なかつたのは、果し得ない復仇の念ゆえではなかつただろうか。この王餘佑の死に接した顔元は「五公、瞑目せざれば、吾の目、其れ瞑すべけんや」と大いに感じ、父の行方をもとめて遼東に赴いた。そして父がすでに客死したのを知つて位牌を奉じて歸り、手厚く葬り、翌年、諸生の資格を棄てて三年の喪に服した。この時から「用世の志」はいよいよ固く、「蒼生の休戚、聖道の明晦は、責め實に予に在り。敢えて天生の身を以て安を偷み、自ら私せんや」と決意を新たにしたという。

かれが、程朱の學にたいする公然たる攻撃を開始するのは、このの間もなくのことであつた。康熙三十年、かれは河南に赴き、各地を歩いて當時の知識人多數と交わる機會を得たが、とくに開封においては醫者を開業し、ひろく人材をもとめようとした。⁽¹²⁾ 農業だけでは生計をたてられなかつたかれは、かねてから醫者として生計を補つていたのである。

また、俠客の李子青、字は木天とあつて大いに天下を論じたが、このとき擊劍を試合し、みごとに勝利を得た。李子青はかれに傾倒し、いご息子をかれについて學ばせた。毛澤東が、『體育の研究』において顔元が「勇士ときそつて勝つた」というのはおそらくこのことを指している。かれは、二三歳のとき、七家の兵書を読んでいらい、軍事科學を大いに研究するとともに、自らも、夜を徹するほどの熱意で技擊の訓練をしていたのである。

この河南行にかれば心ひそかに期待するものがあつたのであろうか、「ひとたび南遊して、人人禪子、家家虛文にしてひとえに孔門と敵對する」をみて、いたく失望し、程朱の學を打倒しないかぎり、孔孟の學はとうて確立しえないことを知つ

た。

一分の程朱を去りて方めて、一分の孔孟を見る。然らざれば、この乾坤を終うまで、聖道、あきらかならず、蒼生、命なし……こゝに於て始めて信ず、程朱の道、熄まざれば、周・孔の道、著われず。聖人、復た起るも吾が言を易えざらん。乃ち断じて之と判ちて兩途となし、天下が、急ぎ後世の新局を捨て力めて前聖の故道に復さんことを望めば、或いはこの乾坤を終うまで、また儒道なきには至らざらん。(習齋記餘一、未墜集序)

という。しかし、宋儒は現代の堯・舜・周・孔にまつり上げられている。韓愈は、佛教を斥けて、殺身の禍を蒙むに至つたが、現代の堯・舜・周・孔を批判するにはそれだけの覺悟が必要である。朱季友(明初、江西、饒の人は、程朱の學說に反論しただけで饒におくつて杖罪に處せられたが、宋儒の學術の品詣(ほんし)を批判するには、それ以上の覺悟を要求せられるであらう。これを口にすれば、身體の安全はもはや保障され得ないかも知れぬ。

然れども一身の禍いを懼れて言わず、氣數を終誣に委ね、民物を終壞に置き、天地を終負に聽せば、恐らく結舌安座して、溝瀆より援かざると、強暴横逆にして人を溝瀆に内るものと、その忍心害理、甚だしくは遠からざるなり。(習齋記餘三、

上太倉陸桴亭先生書)

このように、かれは天下の生民を溝瀆に陥れたのはもつぱら朱子學であり、これを批判しないことは、自らの手で生民を溝瀆に陥れるのと同じ犯罪性をもつと考える。このようなきびしい自己反省から、朱子學にたいするかれの完膚なき批判がでてくるのである。

もちろん學問の腐敗と墮落は、宋儒からはじまつたのではなく、すでに漢儒からはじまつていた。かれには、獨特の道統論があるが、それによればこうである。

孔子、歿して諸子分傳す。……兩漢、起りて、治は雜霸を尙ぶ。儒者は、徒らに遺經を拾いて訓傳をなし、聖學の體用は、殘缺してふるうなし。魏、晉、隋、唐に浸淫して、訓詁、日に繁く、佛老、互に扇り、清談詞章、譁然として四起す。禍、

積みて五季に至り、百氏の學術、一に兵燹に歸し、堯舜周孔の道、更に孰れに従つてか之を問わんや。宋代は、舉世、憤憤として適向する所なきの時に當り、周子（周敦頤）にわかに出でて、其の禪僧壽涯、道士陳搏より傳うる者を以て儒道に雜入し、圖を繪き書を著わし、一宗を創開す。程、朱、陸（九淵）、王（守仁）、皆、之を奉じ、相率いて靜坐頓悟し……明德を明らかにするの實功、涵。相率いて讀講註釋し、……禮樂兵農を習行するの功、廢る。（習齋記餘一 大學辨業序）
かれの弟子王源が「二千年、開く能わざるの口を開き、二千年、敢て下さざるの筆を下した」（居業堂文集八 與壻梁仙來書）と評したのは、既存の學問すべてに對するこのような戰闘性をさしたものにほかならなかつた。

三

朱子學は、朱子によつて完成された壯大な思辨哲學と實踐倫理の體系であつたが、その名教的性格ゆえに、元代には、科學の學として採用され、さらに明代には『性理大全』が編纂されて、體制イデオロギーとして牢乎たる地位を占めてきた。清朝もまたこれを官學として採用したが、康熙自身も朱子學を好み、解義、折中、彙纂などの道學經說や性理精義、朱子全書などの欽定の書物を編纂している。體制イデオロギーとしての朱子學は、新たに勃興した清學＝考證學によつても否定されたのではなかつた。考證學者惠士奇が「六經は服（虔）、鄭（玄）を尊び、百行は程朱を法とす」というように、當時の士大夫の生活規範としてその精神生活をなお大きく支配するものだつたのである。

顏元は、「一分の程朱を去りて、一分の孔孟を見る」ということによつて、この朱子學を打倒すべき對象として明確に敵と規定し、宣戰を布告したのである。なにゆえに、かれは朱子學をそれほどまでににくんだのか。

かれによれば、生命の理は講ずべからざるもの、講じたとしても人は聽くことはできず、聽いたとしても醒めることはできず、醒めたとしても行なうことはできない。共に講じ、共に醒し、共に行なうことが可能なのは、生命の作用たる、詩書六藝

のみである。たしかに聰明なる人間にとつて天を語り、性を語るとは「譚を打ち、拳を猜る」（じようだんをとほし、拳をする）にもひとしいであろう。だが、愚かなる人間にとつては「風を捉え、夢に聴く」がごときものでしかない。このようにして性と理は顔淵・曾子ならぬ一般人にとつては、語り得ぬもの、語るべからざるものとして切斷されてしまう。しかるに、語り得ず、語るべからざる「性理」を語り、一生の心力をついやして注疏をおこなつたものこそ、宋學の諸先生である。

周知のように宋學は、天理を存し人欲を去るための方法として主觀的な修養||居敬と客觀的な知的探究||窮理を説いた。居敬は、靜坐などの方法によつて、内なる本然の性を自覺することであり、窮理は、讀書などをつうじて、事事物物の理を窮めることである。朱子はその具體的方法として半日の靜坐と半日の讀書を説いたわけであるが、この靜坐と讀書を顔元は猛烈に攻撃した。

かれによれば、靜坐などによつて「萬象を洞照」しようとするのは、あたかも鏡花水月（鏡のなかの花、水にうかぶ月）を賞でて満足するがごときもの、それによつてはとうてい眞實をつかむことはあり得ない。

余、戊申より前、亦た嘗つて宋儒に従いて靜坐の功を用い、頗る此味を嘗む。ゆえに身歴して、その妄たり、據るに足らざるを知るなり。天地の間、豈に、流動せざるの水あらんや。地に著せず、沙泥を見ざるの水あらんや。一動一著すれば、仍是、一物だも照らさず。今、鏡里的花、水中の月を玩ぶは、まこと信に人の心目を娛ましめるに足る。若し鏡水を去れば、花月、有ることなし。即ち鏡水に對するの一生は、徒らに自ら欺くの一生のみ。水月を指して以て照臨し、鏡花を取りて以て折佩するがときは、此れ必らず得べからざるの數なり。ゆえに空靜の理、いよいよ談じていよいよ惑

い、空靜の功、いよいよ妙にしていよいよ妄なり。（存人篇 喚迷途 第二喚）

空理空談をもてあそび、鏡にうつる花、水に浮ぶ月をもつて、眞實のものと考えるならば、それは自己欺瞞、自己満足いがいのなにもでもないであろう。氣をはなれて理を語り、氣質の性をはなれて本然の性を語るがごときはこれ同じ誤りを犯すものである。

それのみではない。

愛靜空談の學をなすこと久しければ、かならず事を厭うに至らん。事を厭えば、かならず事を廢するに至り、事に遇わば即ち茫然たり。賢豪も免がれず、況や常人をや。予、嘗つて言う、人材を誤り、天下の事を敗りし者は、宋人の學なりと。(年譜 六〇歳)

三十上下に到りて、書房中に氣を耗し心を勞すれば、人の精神を萎惰し、筋骨をして皆、疲軟せしめ、天下、弱からざるの書生なく、病まざるの書生なし。……千古儒道の禍、生民の禍い、此れより甚だしき者あらざるなり。(朱子語類評)

このように、かれは主靜空談の學が、眞實をおゝいかくすことによつて現實に對する有効性をもたないばかりでなく、眞實を探究しようとする人間の精神と肉體を萎縮させ、腐敗させてしまうことを説くのである。このように、かれが主靜空談の學の人間にたいする腐蝕作用を強調したてんに注目しよう。「虚學」に對して「實學」を、「死學」に對して「活學」をたゞちに對置するのでなく、現實の人間——士大夫を、「虚學」によつて、「死學」によつて、蝕ばまれた存在として徹底的に自覺すること、かれはそこから出發した。讀書についてもそれは同じであつた。

さいしよに述べたように、顔元と同時代の思想家たちもまた、明末の空疎な學問を否定したというてんでは同じであつた。だが、かれらは、それを博く事實に即いて研究することで以て克服しようとした。いわゆる實事求是である。黃宗羲は、「學は必らず經術に源本してのち虚を踏むと爲さず、必らず史籍に證明してのち以て務に應ずるに足る」として經史の實證的研究を主張し、顧炎武もまた「百王の典を考え」「當代の務を綜べる」ために、博く學ぶことを主張した。かれらの研究は、經學、史學、文學、地理學、金石學、音韻學など多分野にわたたり、しかもその研究は、顧炎武の音韻學研究が示すように精緻な實證的研究をともなつていたのである。

これに對して、顔元は、讀書を否定し、博學を否定する。いな、書物を砒素にもたとえることによつて讀書を徹底的に拒む。われ、嘗つて言えらく、但だ朱門に入る者、便ちその砒霜を服し、永く生氣生機なし。……僕も亦た、砒を吞むの人な

り。心思氣力を耗竭し、深くその害を受け、以て六十餘歳にいたるも、終に堯舜周孔の道に入る能わざるを致す。但だ途次において、郷塾の群がり書を讀む聲を聞き、便わち歎じて曰く、惜しむべし、許多の氣力を。但だ人、筆を把り文字を作すを見て、便わち歎じて曰く、惜しむべし、許多の心思を。但だ場屋に出入せる群人を見て便わち歎じて曰く、惜しむべし、許多の人才をと。故に二十年前、但だ聰明にして志ある人を見れば便わち之に多讀を勧めしも、近年來、但だ才器を見れば便わち戒めて多く書を讀むこと勿からしむ。尤も、人、宋人の語錄、性理等を觀るを戒めて曰く、當に淫聲惡色の如く、以て之を遠ざくべし。……試みに觀よ、千聖百王、是れ讀書人なりや否や。三代の後、乾坤を整頓する者、是れ讀書人なりや否や。吾人急ぎ醒めん。(朱子語類評)

書の天下を病ましむるや久し。生民をして書を讀む者の禍いを受けしめ、書を讀む者も自らその禍いを受く、而して世の名づけて大儒となす者は、まさに天下の書を讀盡し、まさに毎篇讀むこと三萬遍、以て天下の倡をなさんとし、歷代の君相は、まさに爵祿を以て天下を章句浮文の中に誘う。この局、大聖賢大豪傑を得るに非ざれば破る能わず。(言行錄 禁令一〇)

古今の文字を率いて天下の神智を食わしむ。(四書正誤四)

千餘年來、天下を率いて故紙の堆中に入れ、身心氣力を耗盡し、人を弱め、人を病ましめ、人を無用にせし者は、皆、晦庵、之を爲せるなり。(朱子語類評)

このようにして、かれは讀書が、たんに無用の學であるばかりでなく、人間の「體魄」と人間の「神智」を蝕み、天下の生民をして讀書者の禍いをこうむらしめるものであると、書物のもつ犯罪的な役割をするべく衝く。「名教、人を喫う」とは、五四時期の魯迅の言葉であるが、かれは、まさしく「書物が人を喫う」ことを主張したのである。士大夫はイコール讀書人であり、書物＝儒教的な經典を讀む能力を以て特色づけられるとするならば、かれはそのようなものとして士大夫たることを自ら拒んだ、といえるであらう。

それでは、かれにとつて書物とは、一體、何であり、經典とは一體何であつたのか。

かれによれば、著述は、それ自體目的ではない。孔子の學は、「内、聖人、外、王者の德」を涵養するものであり、教は、世を治めるための人材を養成するものであつた。だがこれは、現實にみとめられることなく、孔子はやむを得ず周遊の旅に出たが、周遊もまた所期の目的を達することはできなかつた。孔子は六十餘にしてなお道が行なわれないのをなげき、魯にかへつて、刪述著述によつて道を傳えようとしたのである。著述は、周遊ののち、已むを得ずして著わされるべきものであつた。しかるに戰國の諸子たちは、學教を學ばずして周遊を學び、漢宋の諸儒はもつぱら著述を學んだ。かれらは、著述こそが聖人の道であり、その注釋書を編纂することが儒者である、と錯覺した。孔子の著述が已むを得ずして行なわれたものであることをとうてい知らなかつたのである。

しかも孔子は、道を明らかにし得る最小限度のもののみを書物に著わし、後世の人間が、枝葉末梢の文字に溺れて道の本質を見失うことをあらかじめ避けようとした。しかるに、宋儒が、もつぱら註解を多くしたのは、あたかも孔子の堤防を決壊させて汎濫の流れを導き入れようとするもの、「書物いよいよ多くして道いよいよ衰える所以」である。

このように考えるかれにとつて經典とは、人間の性情を陶冶し、政治的實踐を行なうための「譜」にすぎない。

この一路を離れては、幼にして讀書し、長じて書を著わし、訛僞を追うなく、たとい別に一種の四書五經を著わし、一字も差わざるも終に書生なり。儒に非ざるなり。……僕、謂えらく、古來、詩書は、習行經濟の譜に過ぎず、但だその路徑を得れば、眞僞は問うなかるべし、即い僞なるもまた妨げなし。今、之と書冊の眞僞、著述の當否を辨じ、たとい、皆眞にして當ならしむるも、彼は有弊の程朱たり。われは無弊の程朱たるのみ。衣を掲げて裸を笑ひ、薪を抱いて火を救うにちかからずや。(習齋記餘三 寄錢生曉城書)

このように、かれは經典に「習行經濟の譜」としてのきわめて限定したいみしか認めない。

かれはまた別の個所で「經書は乃わち三事三物を記すの簿籍のみ」(習齋記餘六 論開書院講學)とも言っているが、經典がこの

ような「譜」にすぎないとすれば、「譜」自體、あるいは「譜」を読み研究することにはいみがあるのではなく、「譜」によつて實踐した結果が所期の成果をあげてこそ、「譜」としての價值が承認される。かれ自身のたとえによるならばそれはあたかも琴を學ぶがごときもの。琴譜に熟通したところで所詮、譜は琴ではなく、琴を學んだとはとうていいいいたい。學とは、實踐の過程において檢證されるものであり、當然、實踐の過程をもふくむものでなければならぬのである。

このようにしてかれは「譜」自體の研究——經典の研究に埋没することを斷乎としてこぼむ。そして「眞偽は問うことなかるべし、卽い偽なるもまた妨げなし」とまでいふきつてしまふ。たといその研究が、正確無比、いさゝかの誤謬をも犯さないものであるにせよ、「程朱」たること、「文人」たること、「書生」たることの無用性、「一日、生存すれば、一日生民のため」に事を辦すべき」はずの儒者としての思想的頽廢は同罪とされるのである。このようなかれの立場が、やがて乾・嘉の學——考證學へと流れてゆく清朝學術史の流れと明確に對立するものであつたことはいふまでもないであらう。

四

このように考えるならば、かれのいう實學とは一體何であつたのか。かれが、弟子にこたえた言葉に、

如し天、予を廢せざれば、まさに七字を以て天下を富まん、墾荒、均田、興水利。六字を以て天下を強くせん、人皆兵、官皆將。九字を以て天下を安んぜん、舉人材、正大經、興禮樂。(年譜 五五歲)

とある。この最初の七字は、經濟政策に、第二の六字は、軍事政策に、第三の九字は教育政策にそれぞれかゝわるものである。これらを學び、且つ實踐することが、かれの學の内容をなすものであり、それらはそれぞれにかれ獨自の主張を展開するものであるが、ここでは、第三の教育の問題にかぎつて取上げ、それもかれが教育を重視したことはいみについて検討しよう。

かれは桐郷の錢曉城にあてた手紙のなかでつぎのようにのべている。

戊申(康熙七年 三十四歳)の後に^{およ}迫んで忽ち書生文人の儒に非ざるを悟るなり。唐虞の儒は三事を和し、六府を修めるのみ。成周の儒は三物を以て萬民に教え、之に資興するのみ。六徳は即ち堯舜、正徳を爲す所なり。六行は即ち堯舜、厚生をなす所なり。六藝は即ち堯舜、利用をなす所なり。孔門の儒は四教を以て三千人を教えるのみ。文は即ち六藝、行は即ち六行……夫れ堯舜の道にして必らず事を以て名づけ、周孔の學にして必らず物を以て名づく。儼として預じめ後世必らず事をはなれ物をはなれ、心口懸空の道、紙墨虛華の學をなすあるを燭し、先に之が防杜をなす者のごとし。(習齋記餘三)

三事とは左傳(文公七年)⁽¹⁴⁾、尙書(大禹謨)の正徳・利用・厚生であり、六府とは、水・火・金・木・土・穀であり、三物とは、周禮(地官)⁽¹⁵⁾の六徳(知・仁・聖・義・忠・和)、六行(孝・友・睦・婣・任・恤)、六藝(禮・樂・射・御・書・數)である。唐虞の世、六府三事のほかに學術があつたとすれば、異端であり、周公孔子の世、三物のほかに學術があつたとすれば外道である⁽¹⁶⁾。

この六府・三事・三物は、窮極のところ、正徳、厚生、利用の三事につきる。六府は、三事を具體化した「目」細目であり、經世濟民の内容をなすものである。

弟子の李塏が、さらにこれを敷衍して、六府は、

水……溝洫、漕輓、治河、防海、水戰、藏冰、澌權

火……焚山、燒荒、火器、火戰、禁火改火の諸變理之法

金……冶鑄、泉貨、修兵、講武、大司馬の法

木……茶權、抽分

土……井田、封建、山河、城池の諸地理之學

穀……屯田、貴粟、實邊足餉の諸農政

とし、「三事に至つては六府を経緯する所以の者なり」(李塏 廖忘篇)としているのは、三事と六府との關係をいつそう明確にしたものといえるであろう。

つぎに、三物と三事との關係についていえば、六徳は正す所の徳であり、六行は、生を厚うする所以であり、六藝は、用を利する所以であつて、三事と三物はそれぞれに對應する。⁽¹⁷⁾

また、六徳の發現が六行であり、六徳の實事が六藝であつて、六徳が、學術のもつとも根源たるべきものとされるが、かれがもつとも意を用いたのは、むしろ、實事としての六藝であつた。六藝をぬきにしては、六徳も、六行もあり得ない。

かれは六藝のうち、とりわけ禮樂を重んじた。禮樂は兵農とともに實學的な知識、技能の基本的内容となつて「用を利する」べきものであるが、この利についてかれはつぎのよういう。

義を以て利となすは、聖賢平正の道理なり。……后儒、乃るに「その誼を正してその利を謀らず」と云うは過てり。宋人、喜んでこれをいい、以てその空疏無用の學を文る。^{かき}予、嘗つてその偏を矯め改めて云う、「その誼を正して以てその利を謀り、その道を明らかにしてその功を謀る。(四書正誤一)」

董仲舒の言葉をかれはこのように改めることにあつて義理の學にたいする功利の學＝實學を主張する。ごく短期間ではあつたが、かれが、一時期、漳南書院を主宰したとき、つぎのようなカリキュラムにしたがつて教室の配置がかんがえられた。

(年譜 六二歳) おそらく宋の學者中では、かれがもつとも評價した胡瑗の經義齋・治事齋に示唆をえたのであらう。

文事齋 禮・樂・書・數・天文・地理

武備齋 黃帝・太公・孫呉五子兵法、攻守營陣陸水諸戰法、射、御、技擊等科

經史齋 十三經、歷代史、誥制、章奏、詩文等科

藝能齋 水學、火學、工學、象數等科

なお、過渡期として理學齋、帖括齋をもみとめているが、原則として性理學、八股文は學問とはみとめない。禮、樂、射、御、書、數の六藝は、このように、天文、地理、兵法などと並列されて、かれの實學の内容をなすものであるが、それらが、功利＝實效性を目的意識的に追求するものであるかぎり、それ自體の論理を追求することが必然的に要請されるであらう。そ

のことは科學への可能性を開くと同時に、胡適のいうプラグマチズムに墮する危険をもはらんでいる。かれは學問をする主體たる人間の側からそれをはぐもうとした。すなわち、六藝は、かれ獨特の實踐的なみをもつ「習行」をつうじて「天下を易うべき」主體としての人間の道德性を涵養し、身體を強健ならしめるものであつた。

孔門、禮樂射御の學を習行す。人の筋骨を健やかにし、人の血氣を和し、人の性情を調し、人の仁義を長ず。……その動のために陽和を生じ、鬱氣を積痰せず、内を安んじ、外を^{ふせ}扞ぐなり。(顏習齋言行錄 刁過一九)

書齋における「白面の書生」の學問が、いかに思想的頹廢をとまなうものであつたかは、かれが一貫して強調しつづけた所であつたが、六藝を手段とする習動——いうまでもなくそれは朱陸のいう主靜とは對立する概念であるが——をつうじて、健全な身體を育成し、健全な道德、健全な思想を回復させようとしたのである。したがつて道德性の涵養とはいつても、既成の道德、六德や六行をそのまま人間に強制するのではなく、六藝を通じて、より本源的な人間變革の途を追求したといえるであらう。もちろんかれは、そのような習動による習練の結果が、六德にいきつくものであることを豫定しているのであるが——。なお、かれの習動には、六藝のみではなく、勞働をもふくんでいることをつけ加えておく。

このように朱陸のいう主靜ではなく、習動こそが、國を強くし、天下を強くする途だとかれは考える。

かれによれば、三皇五帝三王周孔は、天下に動を教えた聖人、動によつて世道を造成した聖人であつた。五霸はその動を假したものの、漢唐は、その動の一二をもつて時代を支配した。しかるに、晉・宋にいたつては、佛教の空、老子の無、周・程・朱・邵(雍)の靜坐が流行し、言葉がもてあそばれて、不動が主流になつた。天下のひとびとが、讀書、靜坐にふけて士・農・工・商の職業を放棄するならば、正徳・利用・厚生¹⁹のことはあり得るはずはない。これこそ曲學であり、異端であつて聖人の教える動にかえることこそが、いま、われわれに要請されていることである。

吾、嘗つて言う。一身動けば、すなわち一身強く、一家動けば、すなわち一家強く、一國動けば、すなわち一國強く、天下動けば、すなわち天下強し。(顏習齋先生言行錄 學須二三)

毛澤東が、「體育の研究」において、知育、徳育、體育の重要性を主張し、天地の間にはたゞ動があるのみとして、體育こそが、われわれの筋骨を強くし、知識をふやし、感情を調べ、意志を強くするものであること、身體健全なものにしてはじめて感情も正常でありうることを主張したのは、このような顔元の思想に共感するところがあつたのであらう。

さて、すでにのべたように、顧炎武ら、明末清初の思想家の多くは明の滅亡の原因を、より多くその政治制度のあり方に求め、政治の體制的變革をめざした。そして政治の理想をもとめて三代、聖人の典章制度の研究へと進んでいった。政治をもつぱら支配者の道徳性において期待しようとする儒教的な意識に對して、政治を、道徳とは切斷された政治の次元で追求しようとする政治的リアリズムへの方向性を、かれらがついていたとするならば、顔元は、むしろ逆の道をえらんだ。さいしよにのべたように、かれ自身、政治制度への關心をもたなかつたわけではない。だが、かれは變革の主體となるべき人間——士大夫の變革と、士大夫の意識、學問そのものの變革への途をよりいつそうしつうに追求していった。

凡そ、聖人の書を讀めば、便わち轉世の人たるを要す。世轉の人たるを要せず。如し齠齡にして學に入り、書を受くれば、即わち世に隨つて浮沈するを得ず。(言行錄、齊家三)

我を以て天下を易う。天下を以て我を易えず、宏なり。舉國、之を非とするも搖がず、天下、之を非とするも搖がず、毅なり。(同右杜生十五)

このように「我」は「世を轉ず」べき「我」であり、「天下を易う」べき「我」である。その「我」が現實には、朱子學と訓詁學によつて蝕ばれた存在としてあるならば、その「我」を再生させることこそが、學問の出發點になるのであればならない。その再生の方法として、かれは「習行」という獨自な概念を生み出し、手段として六藝をおいたのである。

このようにして、かれは古えの聖人に學ぶべきものを、ほとんど六府、三事、三物に限定してしまつた。このように、古えを、とりわけ己れ自身の再生の契機としてより多くかゝわらせること——このことは、かえつてそれ以外のもの、政治、制度、社會、技術といったものを古えから解放するという作用を果しはしなかつたであらうか。しかもそれらの研究——實學が、たえ

ず實踐の過程において檢證を要求されるならば、今はやがて古えの束縛をつきやぶつてしまひはしないであらうか。かれの復古が、一見、陳腐で、時代錯誤であるかにみえながらも、この時代における重大な問題提起を行ない得たのは、そしてそれがたんなるプラグマチズムに墮さなかつたのは、實踐の主體の問題をたえず明確にしておいたがためであると思われる。

さて、古えが、今とかゝわり、己れとかゝわるかぎりにおいて尊いとされるならば、このように、今への關心をあらわにした思想が、清朝の異民族支配者にとつて好ましいものであつたはずはない。四庫全書總目提要が、存學篇（浙江巡撫採進本）を取上げ、

然れども、うち有激の談多く、先儒を攻駁し、已に甚しきを免がれず。又稱する所の「打諢猜拳」の諸語のごときは、詞氣、亦た叫囂粗鄙にして、大雅において乖そむくあり。性命は、言傳すべきに非ず云云と謂うがごときに至つては、その性命を視ること、亦た幾んど禪家の恍惚に類し、持論、尤も疵ありとなす。殆ど羹あつものに懲りて蘊つけものを吹くものにして、その枉がれるを矯めることの正を過ぐるを知らずや。（四庫全書總目提要 九七 子部 儒家類存目）

と評しているのは、おそらく清朝中朝における體制側の顔元評價を代表するものであつたらう。このような情況のもとで、王源や李塏など顔李學派の熱心な宣傳活動にもかゝわらず、顔元の思想は、久しくかえりみられなかつた。それには、顔元から李塏への學派の展開のしかた自體にも大きな問題がふくまれているが、そのてんについては、また別の機會にゆずらう。

顔元の思想が再發見されたのは、清末の公羊學者戴望（一八三七～一八七三 浙江德清の人）の手によつてであつた。かれは先祖の舊藏の書物から、顔氏の書を得て大いに感動したが、喪亂によつてそれを失ひ、八方手をつくして書物をもとめた。だが、顔李の姓氏を擧げて知るひとはなく、奔走の末にようやく手に入れることができた。かくて同治八年（一八六九）『顔氏學記』が編纂されて刊行されたが、顔元は、當時、このようにわすれられた思想家であつた。こののち、顔元の著書は畿輔叢書に收められ、さらに劉師培らが發行した『國粹學報』⁽²⁾によつて、ふたたび顯彰され、『顔氏學記』⁽³⁾もかれらによつて再刊された。毛澤東が手にしたのは、この書物のいずれであつたらうか。

このころ、章炳麟もまた『僞書』⁽²²⁾のなかで顔氏の學を論じた。かれは、顔元が、光復をわすれず、實踐躬行を重んじたことを以て、三代の英、羅馬の彦も遠からずとしながらも「獨り恨むらくは、其學、物に在り、物物、之を習う。而して槩念抽象の用、少し」と批判した。算、譜、書は、いわば抽象化された符號である。中國の六經百家および官書は、譜ほどには單純明快でないために、古人にひきずられ、道をはなれる結果をまねきやすいが、しかし、問題は、良書かどうかであつて、書物を講讀するかどうかではない。

顔氏は、徒らに中國が、久しく文敝に淹るを見る。ゆえに一切地官をもつて事守となし、人をして窺窕曠間の地を無からしむ。佗あるにはあらざるなり。亦た概念抽象を知らざればすなわち然るなり。然りと雖も、荀卿よりいご、顔氏はすなわち大儒と謂うべし。(顔學第一二)

とかれはいう。

中華のかゞやける文明を自負し、國學をもつて民族主義を鼓吹した革命家章太炎にとつて、讀書そのものをひとしなみに否定しようとする顔元が、批判の對象となつたことは至極當然のなりゆきであつたろう。だが「枉がれるを矯めるには正を過ぎねばならないし、正を過ぎねば枉がれるを矯めることはできない。」(毛澤東・湖南農民運動考察報告)朱子學の無用性を徹底的に糾弾した「四書正誤」「朱子語類評」などの書物が、清朝の支配下、つまり異民族王朝の支配下にあつては、ついに刊行されることなく、民國一二年北京四存學會の顔李叢書において抄本によつて收録されたという事實⁽²³⁾のなかに、われわれは、かれの學問批判がその時代においてもつた重みを感じるのである。

注

なお、顔元についての研究としては、梁啓超「中國近三百年學術史」(一九二六)、錢穆「中國近三百年學術史」(一九三七)、侯外廬「中國早期啓蒙思想史」(一九五六)などの概説書のほかに、楊培之「顔習齋與李恕谷」(一九五六)郭龍春「顔習齋學譜」(一九五七)がある。また國內では、清水潔「顔習齋の習行主義——主とし

て宋明理學排撃と復古主義とに關連して——」(漢學會雜誌4—3)村瀬裕也「顔元の教育説」(上)(思想の研究3)などがある。本稿はこれらの諸論稿に負うところ少なくない。

(1) 毛澤東は、この論文で顔元・李璡に言及しているが、それだけではなく、論文の基調に、顔元學說の影響が感じられる。この當時、毛

澤東の師、楊昌濟の提倡で、靜坐法が進歩的學生のあいだに行なわれていたが、毛澤東はこれに疑問をもっていたらしく、(李銳・毛澤東同志的初期革命活動一九五七)、そうしたことから、いっそう顔元學說に共感したのであらう。

(2) この書物は現存しない。

(3) 葉德輝「翼教叢編」長興學記

(4) 顔元の父が、遼東に赴いたときについて、顔元の父顔長翁事蹟(習齋記餘一〇)に「因不得所後權、憤憤有遯行志。聞滿洲兵好挾人、恨曰、乘幾乎、盍速來。迨戊寅(崇禎十一年)子月東信追……東兵至、遂出從之去」といふ。またその後顔元が遼東に赴いたときの調査によれば、父は鑲白旗の董千總に従つて遼東に來て撥什庫(八旗の下士官)になった。董は「他人皆刃劫來者、阿弟願從我同居、係往生夙緣。豈可奴視」と稱して父を信頼し、瀋陽で糖店を營ませ、家庭をもたせたという。後年、父は歸國しようとして山海關で人參携帶の罪を問われ康熙十一年不遇のうちに死んだ。なお年譜は、この間の事情について「曾某年逃歸內地、及關被獲」と書いてゐる。

(5) 李恕谷年譜一

(6) たとえば、習齋記餘一未墜集序。同上二與易州李孝廉介石。同上六王學質疑序。

(7) 王餘佑については、王源・五公山人傳(居業堂文集四所收)参照。

なおこの間の事情については、顔元自身が従弟の王餘厚傳(習齋記餘五)に書いてゐる。

(8) 徐世昌・顏李師承記一

(9) 習齋年譜五〇歲

(10) このとき、教諭は税服(期におくれて服喪する)のことを報ぜず、このためにかは服を易えて受験するを屑よしとせず諸生を棄てたという。

(11) 王源・顏習齋傳

(12) 習齋年譜五七歲

(13) 書王子雍家語序(習齋記餘九) 駁朱子分年試經史子集議(習齋記餘九)

(14) 夏書曰、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、勿使壞。九功之德、皆可歌也、謂之九歌。六府三事、謂之九功。水火金木土穀、謂之六府。正德、利用、厚生、謂之三事。(左傳文公七年)

(15) 以鄉三物教萬民、而賓興之。一曰六德、知仁聖義忠和。二曰六行、孝友睦婣任恤。三曰六藝、禮樂射御書數。(周禮地官)

(16) 唐虞之世、學治俱在六府三事、外六府三事而別有學術、便是異端。周孔之時、學治只有箇三物、外三物而別有學術、便是外道。(言行錄下世情一七)

(17) 昔唐虞之治天下也、三事六府而已。君臣朝野之修齊治平、和三事、修六府而已。六府亦三事之目、其實三事而已。……至周武王光有天下、周公相之、……以三物教萬民、而賓興之……曰六德、曰六行、曰六藝。其實六德即所正之德也。六行即所以厚其生也。六藝即所以利其用也。(駁朱子分年試經史子集議 習齋記餘九)

(18) 蓋三物之六德、其發現爲六行、而實事爲六藝。(習齋年譜五七歲)天下皆讀作著述靜坐、則使人減棄士農工商之業、天下之德、不惟不正、且將無德。天下之用、不惟不利、且將不用。天下之生、不惟不厚、且將無生。是之謂曲學、是之謂異端。(駁朱子分年試經史子集議 習齋記餘九)

(20) 國粹學報の發刊辭は、過去の學ぶべき思想家として、王陽明、顔元、戴震の三人をあげ、つぎのようにのべてゐる。

夫前賢學派、各有師承、懿行嘉言、在在可法。至若陽明授徒、獨稱心得、習齋講學、趨重實行、東原治經、力崇新理、椎輪輶路、用能別開途徑、啓發後人。承學之士、正可師三賢之意、綜百家之長、以觀學術之會通。豈不懿歟。

(21) 國粹學報四年六號、紹介遺著參照。

(22) いわゆる新廬書(皇漢共和二千七百四十一年の自序のあるもの一

(23)

九〇四年東京に於て出版)による。

顔元の著書のうち、四存篇、言行錄、關異錄、習齋記餘は畿輔叢書(光緒刊)に收められたが、四書正誤、禮文手抄、朱子語類評、記

餘補編は抄本として傳わつたものを四存學會が顔李叢書に收めた。

(四存月刊一二期)